

保育所入所にみられる3歳未満児の状況(1)

—遊び・食事・睡眠について—

0 土山 忠子

(大阪薫英女子短大)

平野 信喜

(日本学園短大)

I. 研究の目的

保育所における3歳未満児保育が、乳児の心身の発達、ひいてはパーソナリティーの形成に及ぼす影響について、随分論議されてきた。それは、保育所入所に伴う母親との分離不安や情緒不安が中心的課題であった。このことに関連し、過去に数回、本大会(1978、1979、1980、1982)において発表を行ってきたが、今回は、これらの研究をふまえて、4月入所児と6月における乳児の遊び、食事、睡眠の実態について調査をし、4月と6月における0歳児、1歳児、2歳児それぞれを遊び及び生活面から比較考察をする。4月と6月とでは差がみられるか、0・1・2歳児と年齢による差があるのか、また、1・2歳児の場合には、新入児と継続児とでは差があるのか、保育所と家庭とで差がみられるのか、などについて検討を加える。ただし保育所と家庭との比較については、次回に譲ることとする。

これらの考察を通して、保育所生活が3歳未満児にとって安定した生活の場であり、その発達と幸福を保障する場とするための基礎資料として役立てることを目的としている。

II. 研究の方法

(1) 対象児

堺市に所在する、こひつじ保育園の0歳児20名、1歳児30名、2歳児35名、計85名で、内訳は[表1]のとおりである。

[表1] 対象児の内訳

年齢	新入児(R)	継続児(C)		計
		0歳児(C0)	1歳児(C1)	
0才	20名(100%)			20
1才	12名(40%)	18名(60%)		30
2才	6名(17.1%)	12名(34.2%)	17名(48.5%)	35

(2) 調査の方法

保育所ならびに家庭での乳児の実態を把握するためにチェックリストを作成した。各項目について毎日、個人別に保育所では担任保育士、家庭では保護者にチェックしてもらった。

- a) 保育士用のチェックリストの内容(別紙当日配布)
b) 保護者用のチェックリストの内容については、今回は省略する。

(3) 調査の期間

第1回....1982年4月3日から4月30日まで、日

曜、祝日を除く毎日。

第2回....1982年6月1日から6月30日まで、日

曜、祝日を除く毎日。

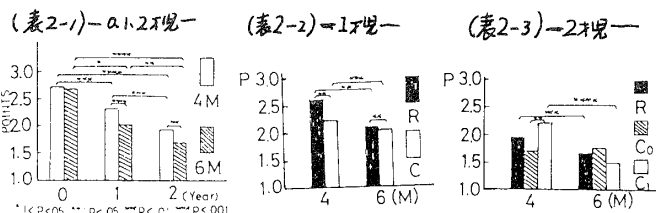
(4) 集計の方法

チェックリストの各項目の「イ、ロ、ハ、ニ、ホ」それぞれ1点から5点まで配点し、項目別、個人別、週別、月別に得点を集計して平均点を求め、t検定を用いて平均の差の検定を行った。

III. 結果と考察

(1) 午前中の遊びについて (表2-1, 2-2, 2-3)

午前中の遊びの評価得点



0歳児の場合、4月と6月とでは有意差がみられなかった。4月も6月も欠席日数 [表3] 欠席状況が10日以上の子が20%を占めており、0歳児全員が新入児で初めての保育所生活であるため4月は環境の変化で体調を崩し6月頃になると手足口病とか水痘、突発性湿疹など伝染性疾患による欠席が目立ち、遊びの面にもその影響が現われているように思われる。

1歳児は、4月と6月とでは0.1%水準の有意差であり、2歳児では5%水準の有意差がみられた。これは、1・2歳児の[表3]の欠席状況と関連している。また、1歳児は0歳からの継続児が64.2%、2歳児では82.3%が継続児であるため、保育所生活へも順応しており、伝染性疾患に対する免疫もあるため罹病率も低く、従って出席が良好で遊びの面での高まりがある。

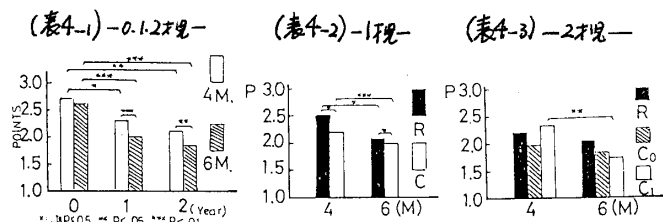
各年齢間を比較してみると、4月は0歳児と1歳児および1歳児と2歳児においては5%水準の有意差があり、0歳児と2歳児では0.1%水準の有意差がみられた。遊びの高まりは、0歳児よりも1歳児、1歳児よりも2歳児と年齢の高まりに比例しているといえる。

1歳児の新入児(R)と継続児(C)では、4月および6月のいずれも5%水準の有意差がみられた。2歳児は、0歳からの継続児(C0)と1歳からの継続児(C1)で

は、4月に5%水準の有意差がみられたが6月には新入児(R)も継続児(C0,C1)にも有意差がみられなかった。1歳児も2歳児も4月の時点ではR群とC群との間に差がみられるが、6月になると遊びの面において保育経験年数のハンディは一応解消するのではないと思われる。2歳児のR群においては、4月と6月を比較すると1%水準、C1群が0.1%水準の有意差を示しており、両群に遊びの深まりがみられるのである。

(2) 午後の遊びについて (表4-1, 表4-2, 表4-3)

午後の遊びの評価得点



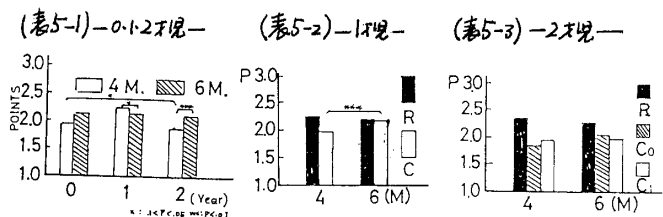
0歳児は、午前中の遊びと同様に4月と6月との有意差は無かった。1歳児では、1%水準の有意差、2歳児では5%水準の有意差がみられた。

各年令間を比較すると、4月は0歳児と1歳児、0歳児と2歳児で5%水準の有意差、1歳児と2歳児では有意差が無かった。6月は0歳児と1歳児、0歳児と2歳児に1%水準の有意差があり、1歳児と2歳児に有意差はみられなかった。

1歳児のR群とC群間では、4月・6月いずれも5%水準の有意差がみられ、さらにR群は、4月と6月で5%水準、C群では1%水準の有意差であった。2歳児のR群、C0、C1群間では、4月・6月いずれも有意差はみられない。C1群だけが、4月と6月間に5%水準の有意差がみられた。

(3) 食事について (表5-1, 表5-2, 表5-3)

食事における評価得点



0歳児は4月と6月とでは有意差がみられない。離乳食開始の乳児、離乳食になれた頃に入梅期を迎え食欲の減退、罹病などにより食事面では思わしくない。

1歳児では、4月と6月を比較すると5%水準の有意差である。2歳児では、1%水準の有意差で6月の方が思わしくない結果が出ている。これは、それぞれの年令の欠席率(表3)に比例しているのである。

年令間の比較をしてみると、4月では0歳児と2歳児との間に5%水準の有意差、6月においては3群間

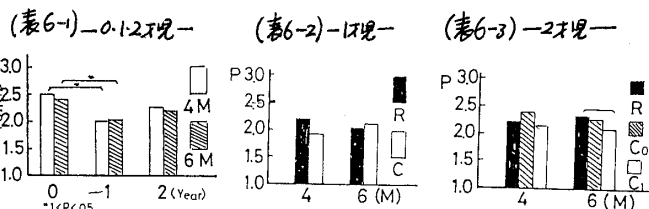
に有意差はみられなかった。

1歳児のR群とC群間では4月と6月も有意差はみられなかった。C群においては4月と6月で1%水準の有意差を示している。食事は、体調や気温、環境の変化、個人差など、様々の要因によって左右される。

2歳児のR群、C0、C1群間でも、4月も6月も有意差はみられなかった。

(4) 午睡について (表6-1, 表6-2, 表6-3)

午睡における評価得点



どの年令においても4月・6月では有意差は無い。

年令間の比較をしてみると、0歳児と1歳児の4月と6月に5%水準の有意差がみられた。1歳児は、60%が保育経験児であるのに比して、0歳児は全員が新入児であるため、新しい環境への適応に午睡面においても多少の困難を推察するのである。

1歳児のR群とC群間には、4月も有意差はみられなかった。

2歳児のR群とC0、C1群間においては、4月では有意差は無く、6月ではR群とC1群間に5%水準の有意差がみられた。

IV. まとめ と 今後 の 課題

以上、3歳未満児の保育所生活における最も日常的な遊び・食事・午睡についての実態を分析し考察を加えた。4月は進級・入所という新しい環境の変化や、母子分離不安などがあり、遊びや生活面において落着かないのは当然といえる。6月は集団生活にもなれ、よい結果を期待するのであるが、実態は、食事・午睡面では大きな変化は無かった。しかし遊びの面においては、0歳児を除いて有意差がみられた。1・2歳児においては、保育所生活の中で遊びの広がりや深まりのあることを示している。その反面、3歳未満児にとって生活面の配慮が、いかに大切であることを認識し、年間を通して最適な配慮をしなければならない。

さらに、3歳未満児にとって、保育所生活がプラスとなるためには、家庭の理解と協力が不可欠であり、保育を1日24時間の中で把握し、計画・実践していくことが、子どもの心身の負担を軽減するだけでなく、より豊かな生活を経験し、その発達を助長することができるのである。